



低SES世帯の子どもにおける言語の状況 — 支援者へのインタビュー調査を通して —

飯田 都

(浜松学院大学)

※本研究は、公益財団法人橋本財団の研究助成を得て実施された研究の一部である。

Research Question

- どのようにしたら、経済的に恵まれない(以下、低SES : Socio-Economic Status) 世帯の子どもの**言葉の力**を支え、彼らの**非認知的能力**を高めることができるのか？
- 適切で効果的な言語教育支援はどのようなものか？

非認知能力とは？



認知能力

対人スキル

- 協調性
- 統率力
- 柔軟性
- 共感力
- 傾聴力

対自己スキル

- 道徳心
- 倫理観
- 探究心
- 自己肯定感
- 自律性

対課題スキル

- 実効力
- 時間管理能力
- 批判的思考力
- 分析力
- 論理的思考力

非認知能力の効果

非認知能力

短期的な影響

Poropat(2014)

学校の成績
学力

長期的な影響

Heckman & Rubinstein (2001)
Heckman, Humphries & Kautz (2014)

就職率
将来の年収

生涯にわたっての持続的な影響力

ペリーー幼児教育計画の効果(40歳時点)

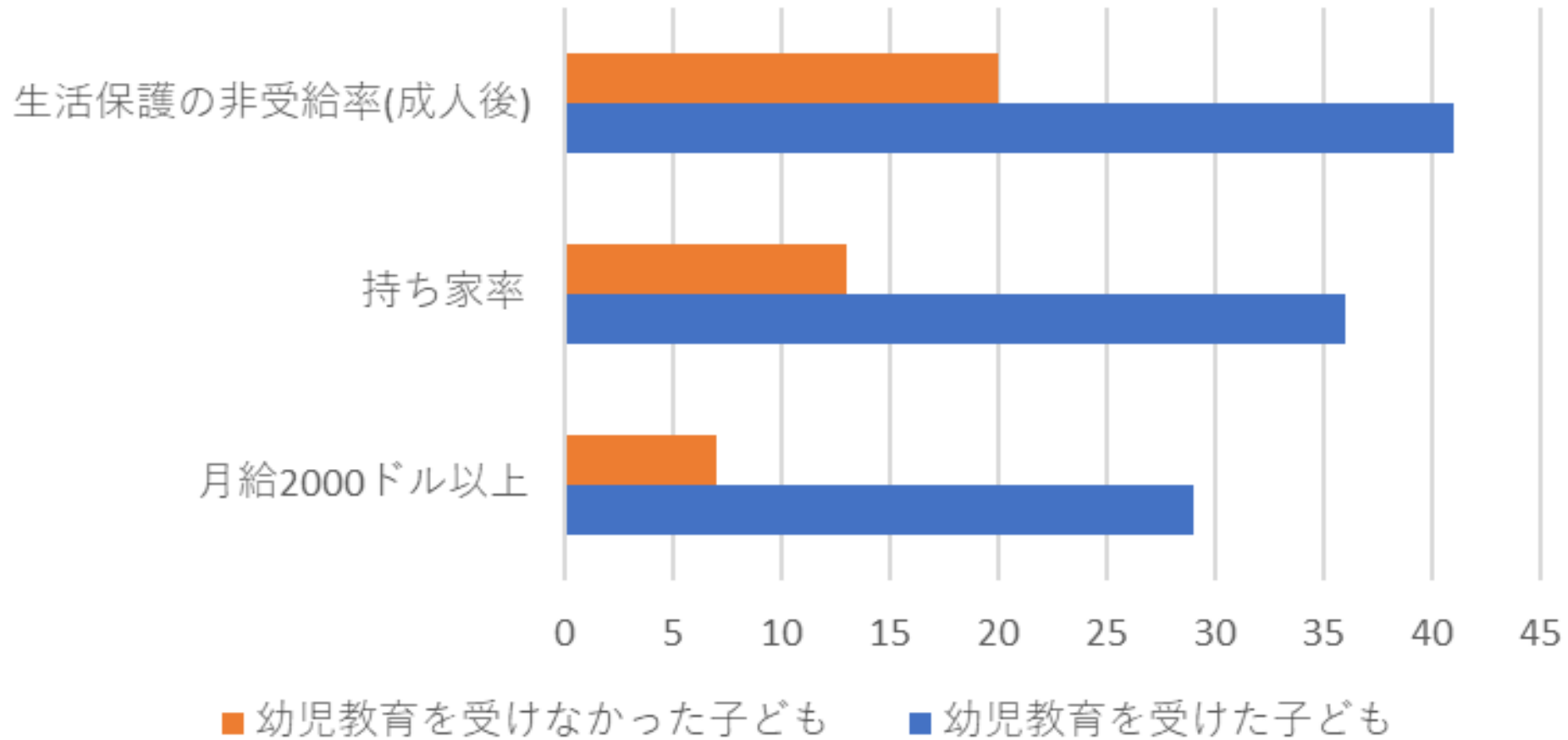
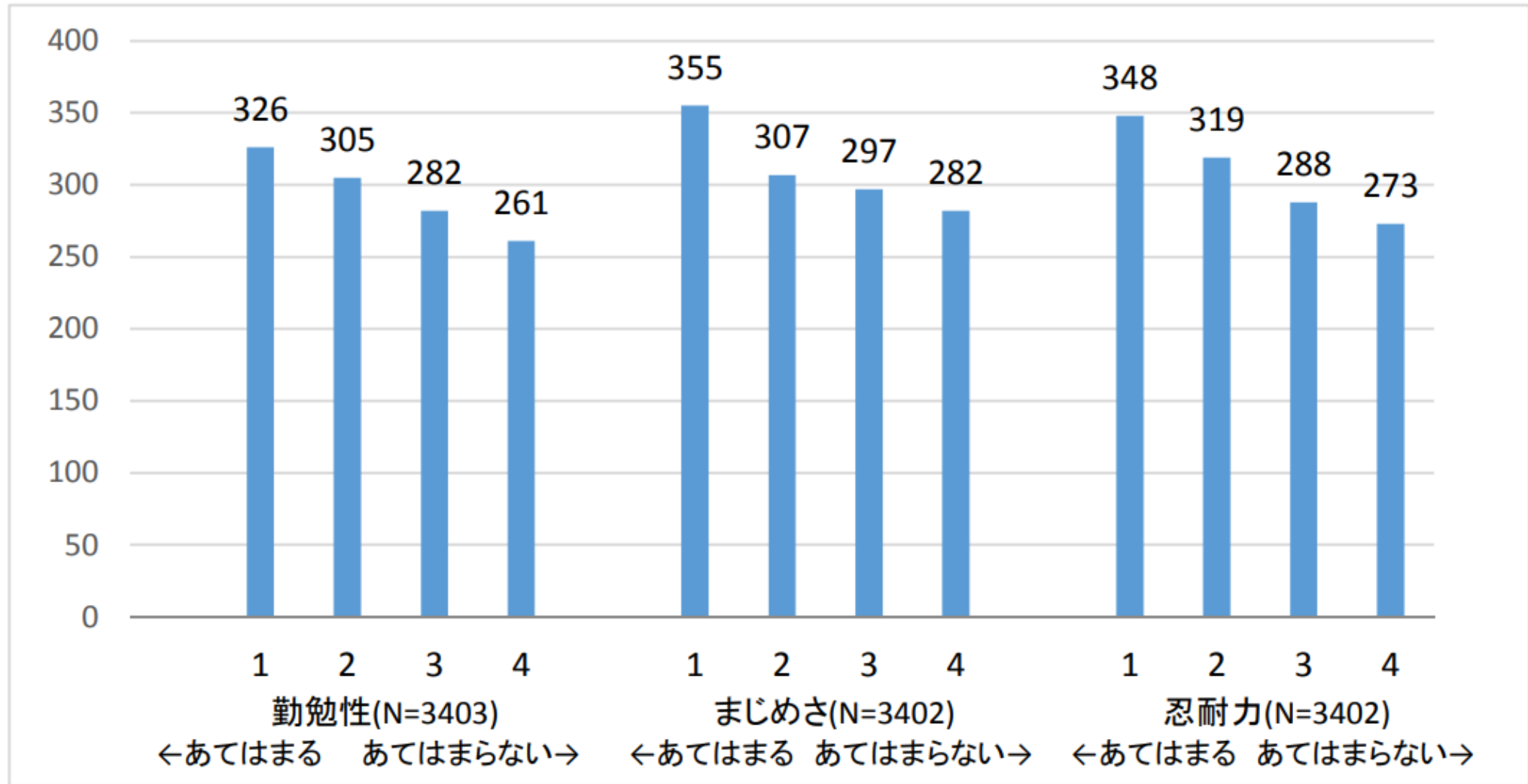


図1 非認知的スキル別の平均所得(単位:万円)



問題と目的

遠藤ら(2017)

- 非認知能力の中でも、特に将来的なアウトカムとの関連が指摘されるのは**自己制御**、自尊心、向社会性、レジリエンスである。

D.Suskind(2018)

- Heckmanがいうように、子どもの学業上の成功に関する重要な決定要因は**自己制御**と**実行機能**であり、これらは“言葉”をキーとして育まれるものである。

Vygotsky(1934)

- **自己制御**においては、言葉のスキルが大きな役割を果たす。

問題と目的

野島(2022)

- 言語能力とは、成長に必要ないろいろな能力を身につけるための一番基礎的な力。
- 言語能力を伸ばすことが、学力だけでなく他の種類の非認知能力を育てることにもつながる。

Horace Bénédict de Saussure

“言語によって世界は分節され認知される”

- 世界とは、その人が所持する言葉によって描き出されたもの。

問題と目的

- 言葉の力を支えること
 - 自己概念の育成
 - 体験・学習したことについて意味づける力
 - 自己表現力
 - 他者と関わる力
 - 自己形成・人格の発達
- 言葉の力に裏打ちされた内省力は、他者との良好な関係構築、社会的問題解決、そして他者のための自発的な行動である向社会的行動といった非認知能力の発達につながっていく

言葉の力を支えることは、貧困からの好ましくない影響を回避するための一つの方策となり得るのではないか？

問題と目的

- 海外では低SES世帯の子どもは、言語の力に課題を抱えていることが示されている（例えばHart & Risley(1995,2003)など）。
- わが国においては、SESと言葉の関係を捉えた研究が乏しい。



わが国の低SES世帯の子どもの言語の様相を把握するとともに、どのようにすれば彼らの言語の力を育むことができるのか、支援のニーズを探索することを目的とする。

方法

調査実施時期：20XX年1月～3月

調査対象：低SES世帯の子どもに直接接し、支援を行っている
5団体6名

方法：半構造化インタビュー（オンライン）

調査内容：

- A. 子どもの言語の特徴・・・1) 語彙、2) 読み言葉・話し言葉・書き言葉、3) 学習言語、4) 生活言語、5) 外言・内言・独り言
- B. 子どもを取り巻く家族や周囲の環境で使われている言葉の特徴

※本稿では主にA 1)～3) ならびにBについて報告する。

結果と考察

1.子どもの言葉の特徴

1-1. 語彙

言葉の特徴	背景にあると考えられる原因
・ 同年代の子どもに比べ語彙が少ない	・ 大人の中で交わされるまともな会話を聞く機会なく育ってきている。社会経験に乏しい。
・ 使う語彙が拙い	
・ 語彙の種類により多少に偏りがある a) 少ない言葉 ・ ポジティブな言葉、他者を敬う言葉、信頼を表す言葉、感謝の言葉 ・ 自分の気持ちや感情を表す言葉 ・ 謝る言葉 ・ 欲する言葉 b) 多い言葉 ・ ネガティブな言葉、暴力的・攻撃的な言葉 ・ 自分を守る言葉 ・ 性的な言葉	・ 親の言葉が子どもにトレースされている。 ・ 人間への不信。優しい言葉掛けを受けた経験がなく、自分が経験した(掛けられた)言葉をそのまま他者に使っている。こうした言葉が出てくるだけのゆとりが心にはない。 ・ 本当は言いたい、わかってほしいことをたくさん持っているが、言葉にする訓練ができておらず、聞いてもらった経験もない。幼児期、自分だけを見てほしい時期に、そのようにしてもらった経験がない。自分の気持ちを言ったら怒られるのではないかとの不安。黙っていることが一番安全であるとの考え。感情表現ができるような安心感がない。 ・ 謝るということ = 自分を全否定し負けを認めること、との認識。謝っても許されなかった経験があるからか？ ・ 我慢をする癖がついてしまっている。 ・ 自身が育ってきた環境で浴びせられてきた言葉。 ・ 自分に自信がなく、大丈夫だと思うことができていない。 ・ 家庭で性的な場面、情報に接する機会。

遠藤(2015)

内面状態を表す言葉である感情語や心的状態語の獲得

- ①スムーズで明確な内面状態の伝達や理解が可能になる、
- ②記憶を形成する能力が発達するのに伴い、言葉で表現することを通じて過去の経験を他者と共有することや、自己を振り返り出来事について洞察を深めることができるようになる
- ③自己形成や人格の発達につながっていく

→この言葉の力に裏打ちされた内省力は、他者との良好な関係構築、社会的問題解決、そして他者のための自発的な行動である向社会的行動といった非認知能力の発達につながっていく

1-2. 読み言葉・話し言葉・書き言葉

読み言葉：

- 小学生以上の年齢であっても、句読点で句切った読み方ができない。
言葉や節の区切りを反映させた音読の困難
→本人も次第に読むこと自体が嫌になっていく。
他者が聞き理解することが難しいケースもある。
- 図書を与える等、環境を整えても、読書や黙読には関心を持たず自発的には読むことに取り組まない。

話し言葉：

- 単語で交わされることが多い。
- 対立的・攻撃的な言葉を使ったやりとりが多い。
- 感謝の言葉等、心にゆとりがないと発せられることのない言葉は話されない。

1-2. 読み言葉・話し言葉・書き言葉

書き言葉：

- 平仮名、カタカナ、漢字、すべてにおいて、書くことは苦手である。
- 書く経験がこれまでに少なく、ペンの持ち方もわからない子どももいる。
- 読み取れるような漢字が書けない子が多い(部首の間に不自然なスペースが入る等の理由により)。
- 手本があれば似せては書けるが、正確な字が書けない。
- 撥音を書くことの困難から、書けない特定の語が存在する（ミックスマックス等）。
- 総じて書く速度が遅く、板書をノートにとることができないケースもある。
- 自分のオリジナルの体験や感情がないので、テンプレートを真似て書く以上の文章作成が難しい。
- 文章化の困難。言葉で言えば理解できるが、それを文章にする力がない
→本来力はあるが、開拓、掘り起こされていない。

※読み言葉、書き言葉、話し言葉について、発達特性による違いはあるが、低SES世帯の子どもに共通の特性はないとの見解を持つ支援者もあった。

1-3. 学習言語

- 実質義務教育が身に付いておらず、基礎学力に欠ける。言葉の力がなく、何かを学ぼうにも、言われていることがわからない。学習言語は、子どもたちにとって“高級品”のようなものである。
- 国語力がないことが大きく影響し、教科としては算数が最もネックになり、文章題に特に課題が集約されている。問題の文章が理解できないために、問題文が何を問っているのかわからない。文章題において、どこに何をすればいいのか、何が要求されているのかが理解できない。
- 文章の意味を理解すること、仮定の話を想定して読み進めること、他者の立場に立った話を理解することが難しい。
- 足し算は言葉を介した理解ではなく、指を使って数えることで答えを出しているため、3桁になるとできなくなる子どもがいる。
- 教科書は学校に置きっ放しであり、家庭に持ち帰らない。教科書を開いて学習に関わる文字に触れたり言葉を読もうとする習慣がない。
- 比較的年齢の近いボランティアの大学生とは、遊び感覚で英語を楽しく学ぶことができている。英語は積み上げの知識が要らず、嫌な感じが無い。

1-4. その他の言語使用の特徴

- 言葉を発するのに時間を要する。
- 叱られることに対し極端に敏感になっており、自然かつ思いのままには言葉が出てこない。
- 否定されたり都合が悪くなると、泣くことによりコミュニケーションを遮断する癖がついている子どももいる。言葉を使って話し合ったり一緒に考えるための会話が成立しない。
- 中学生になっても秒針のある時計を読むことができない子どももおり、時間についての理解やそれを支える言葉に不安があるケースが存在する。
- 関わりを持つための言葉が出ない。
- 母親に対しては「お母さん」と呼ぶが(どのような母であっても子どもにとっては神様のような存在)、兄弟や父親のことは呼び捨てで下の名前を呼ぶ様子がある。

2.親や周囲の者が使う言葉の特徴

- 親が家庭でどのような言葉遣いをしているかは、とても丁寧か、もしくは乱暴かの両極端である。
- 親自身もまた、社会への不信に満ちた言葉を聞き、感謝等の前向きで心豊かな言葉に触れる機会がなく育ってきている。
- 親の語彙も総じて少なく、シンプルな単語を使い会話をし、ポジティブな言葉は少なく、きつい言葉、責める言葉、自己責任を問う言葉、対立的な言葉をよく使用する。一定の語彙で生活している印象がある。
- 家庭内は常に罵り合い、乱暴な言葉が飛び交っており、良い言葉を親も使っていない。
- 「～しなさい」といった即決判断の言葉を子どもに向け、論理的に言葉を使って子どもに説明することがないので(親自身もまた、子ども時代にそのようにされてきた)、コミュニケーションそのものが豊かになりづらい。
- 親たちは収入を得ることに精一杯である。子どもに対しゆとりをもって、そんなつらいこと(嬉しいこと)があったんだね、よかったね、というような会話がほとんどない。
(親子で一緒に遊びに行き、楽しい経験を共にすることが少ない)
- 言語を扱うスキル、言語を使った思考の組み立て回路に乏しい様子が感じられる。
- 「お世話になっています」といった、ちょっとした大人の挨拶の言葉の使用がない。
- 他人がしてくれたことに感謝する、自分が悪かったから謝る、という言葉と行動の文化が欠落している。
- 聞かれていることや言われていることが理解できず、内容が合う返事をする事ができない。

支援への示唆

- 座って食べることや、「いただきます」といったマナーの言葉は、支援者が一人当たり3年くらいの時間をかけて教えるくらい、時間を要する。
- 特に、(虐待等により)大人に傷つけられ信じていることができずにいる子どもの場合、目標とする状態に至るには、傷つけられてきた年数の倍の期間がかかる。
- 子どもを良くしようとするならば、家庭支援をしないといけない。どうしても、子どもの暮らす家庭、子どもの親に関わっていかざるを得なくなる。
- 継続した支援が必要で、支援の「人」が変わらないことが大事である。
- 低SES世帯の子どもには、発達課題も併せ持つケースが多い。課題は複合的であり、親も何らかの疾患、障害を抱えていることがある。
- 近い言語コミュニティの人が集まりやすく、異なる言語文化を持つ人との接点に乏しい。
- 低SES世帯、虐待のある家庭は、地域から孤立しており、親も子も孤立している。
- 親が支援を求めている、支援希求度が低い家庭も多い。

さいごに

- SESの低さが子どもの言語の上での困難につながっているのか、障害等の他の要因に依るものであるのかの判断には、慎重であることが求められる。
- 平均的な子どもの言葉との違いだけにフォーカスせず、共通している部分にも目を向ける必要がある。
- 子どもにとって、比較的楽しくできること(積み上げの知識がなくとも今から新しく始めることができる)、警戒せずとも接しやすく、けれども異なる言語コミュニティにある人(大学生ボランティア等)と一緒にできること、継続的かつ長期的に同一の支援者が関わる等、言葉を育むために有利な条件に配慮した場づくりと学びの順序を考慮することが大切である。
- 子どもだけではなく、その親をはじめとした周囲の者をも含めた言葉の力のエンパワメントがより効果を持つと考えられる。
- 地域や支援者により、同一の子どもについてであっても異なる見解が語られることもあり、本研究で得られた知見を、実際の子どもの言語使用の様子と照らし合わせて確認する必要がある。

わが国の低SES下にある子どもの言語的特徴が、学術的に未だ明確に示されていないことに加え、その言語的支援のあり方についても議論が及んでいない。

- 諸外国においては、移民の子どもへの言語支援のニーズとあわせて、貧困下にある自国民の子どもへの言語支援があわせてなされてきた経緯

マサチューセッツ州(米国) :

幼児期から言語教育を強化する政策の実施

就園前(4歳)から小学校3年生まで(プリK-3)の一貫した言語教育実践

ヘッセン州(ドイツ) :

就学前の言語教育機会を確保するため就学時面接の時期を前倒し

対象年齢のすべての子どもの言語発達調査体制が整えられ、子どもへの言語教育支援につなげる

- 標準化された言語発達検査による、子どもの言語的特徴を明らかにする
- それに対応する効果的な言語支援のあり方を考える